



Title	研究助成をお受けして
Author(s)	佐藤, 靖史
Citation	癌と人. 1996, 23, p. 43-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23882
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研究助成をお受けして

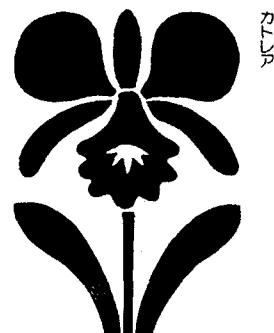
佐 藤 靖 史*

平成6年初旬、まだ私が大分医科大学第一内科に在籍しておりましたとき、大阪癌研究会から研究助成を頂くことができました。どうも有難うございました。

当時在籍しておりました大分医科大学第一内科は、主に内分泌代謝系疾患と循環器系疾患を対象とした臨床教室であります。そこで私は血管新生という現象を中心に増殖因子やサイトカインの研究に携わっていたのですが、その研究の過程で血管細胞を用いた潜在型TGF- β 活性化の解析法を確立しておりました。私が大阪癌研究会に応募いたしました研究テーマ「悪性腫瘍の潜在型TGF- β 活性化機構の解明とその制御」は、当時担当しておりました臨床領域とは関係なく、細胞生物学的興味から開始したものであった訳です。ところが、その後の約1年の間に、私の人生にとって最も大きな変化が訪れました。恩師、桑野信彦先生のご推薦と、諸先輩先生方のご尽力によりまして、平成6年12月より東北大学加齢医学研究所腫瘍循環研究分野を担当させて頂くことになったのです。そして現在は、腫瘍生物学を中心とした基礎研究に専念している次第です。ですから、大阪癌研究会から頂戴した研究助成は、私の人生の転機を象徴するものとなった訳です。

助成して頂きました研究費の大部分は研究室のセットアップの一部として使わさせて頂きました。また大分医科大学で開始していた脳腫瘍（グリオblastoma）由来培養細胞を用いた

潜在型TGF- β 活性化機構の研究は、移動のために一時中断しておりましたが、新しい研究室のセットアップも完了し、ようやく再開することができました。そして最近、潜在型TGF- β の活性化を抑制するであろうと考えて合成したペプチドの中に、全く逆の作用を有するものが見出されました。研究というものは、予想外の結果が得られたときにこそ重大な発見が隠されているものです。現在得られている結果が重大な発見につながることを念じつつ研究を続いている次第であります。



* 東北大学加齢医学研究所腫瘍循環研究分野、平成5年度研究助成金交付者